

第 65 期テニスを楽しむ会 蕨大会報告

佐藤徹郎 (7 組)

参加者: 牧野泰晴(1組) 関賢治(2組) 原田義則(3組) 若柳直人(4組)

内堀信、布施修一郎(6組) 佐藤徹郎(7組) 中山正光(11組)

7 月 14 日(日)は巴里祭、とにかく暑かった。定刻の 10 時45分、蕨駅西口に 8 名全員が揃った。

実行委員長の関君に導かれ、徒歩 5 分弱、会場は、蕨市テニス協会理事長でもある関君が住まうマンションの敷地内にあり、本大会は居住者の共有物を拝借して実施された。

試合は重複しない他の 7 人と作るペアによるダブルスで行われ、布施会長挨拶、原田選手代表宣誓の後、4 時間にわたる熱戦が、手入れの行き届いたオムニコート上に繰りひろげられた。

それぞれの資質、経験、技量に従い、口撃、笑撃をも繰り出す工夫をこらした戦いは、俊敏華麗、青春を髣髴させる美技と、緩慢加齢、朱夏の蕨にあって、既に玄冬、晩年を迎えつつあると思わざるを得ない珍プレーが交錯した。

目を瞠り、時に目を蔽う。さもあらばあれ、65 期 65 歳、テニスは楽しい。

あまりの熱戦に、接着剤が溶け、サモトラケの二ヶに因む有名ブランドの靴底が剥がれるアクシデントが発生、循環器病から解放された内堀君は、終日足で苦勞することとなった。

さて結果は、若柳君が横綱白鵬状態。ひとり全勝、他は推して知るべし。

口々にレバタラと筋肉、関節の不調を言い募りながらも、関君の周到な準備と心遣いに感謝を忘れない面々を眼前にして、なにがなし誇らしく愉快であった。

大会終了後、温泉で疲れた心身を癒し、満を持して、蕨駅近くの居酒屋「飛雄馬」で行われた懇親会に臨んだ。懇親会には、今回プレーする体調ではなかった宮澤憲一君(10組)と、「蕨の会」会長の成澤文和君(4組)、同期会代表幹事上原昇君(2組)が合流し、盛会となった。

ビール、焼酎、日本酒と進むうち、いつもの、もしくはいつか見た光景が一通り展開された。

この日、掉尾を飾ったのは原田君の全仏オープン観戦記、ローランギャロスレポートである。

PCを駆使し、1500 枚のショットの中から、シャラポフ vs.ウィリアムズ戦やヒンギス、マッケンロー、ビランデル等、往年の名選手、さらには原田夫人のポートレートまでが紹介された。マスメディアとは異なる手法とアングルからなる渾身の懇親会レポートであった。

かくて、時は来り去る。最後に、秋の軽井沢での再会を約し、散会。多分、20 時。

以上 (7 月 19 日記)

【写真説明】

- ① テニスコートでの集合写真(試合前)、 ② 同(試合後) (中山君撮影)
- ③ プレイ後の懇親会 (上原君撮影)



↑① 試合前 ↓② 試合後





③ 「テニスの会」・「蕨の会」合同懇親会

テーブルを囲んで左より 中山、成澤、牧野、原田、宮澤、布施、佐藤、上原、内堀、若柳

中央 関